

文学作品の語り手を超える領域を読むことで開かれる作品世界の重層性

——バーネット『小公女』における語りの分析より——

The Multilayer World of *A Little Princess* Opened by Reading Superior Narrator

丸山 範高

MARUYAMA Noritaka

(和歌山大学教育学部)

2020年10月16日受理

要旨

本研究では、時代を超えて多くの読者に感動を与え続けてきた『小公女』(*A Little Princess* 1905年版翻訳)について、語り語られる作品のことはの仕組みを捉え、語り手の批評意識を超える領域を読むことで、登場人物たちの主体的に生きる姿が織りなす作品世界の重層性を解明した。それは、主人公に焦点化して作品世界を分析する先行研究を相対化するものである。

『小公女』は個性的な登場人物たちが種々様々な感情を交錯させながら展開されるが、作品のことはの仕組みを分析していくと、作品世界に生きる人物たちについて語り手が批評しきれていない領域が浮かび上がる。こうした語り手の意識を超える領域を読むことで、ストーリーの流れを表層的に捉えたり主人公を中心に作品世界を表象したりするだけの読みを超え、登場人物たちが相互主体的に関わり合う作品世界の重層性が開かれる。

『小公女』の作品世界では、心を通わせることのできる人物とは絆を深めるが、それがかなわない人物とは関わりを避ける主人公の姿を中心に、それぞれの登場人物がおのおの独立した他者性を発揮しており、人と人とが理解し合うことの尊さと難しさが対照的に描き出されている。

1. プロローグ

大村はま(1983)(2003)は、読者が作品世界に心揺さぶられ引き込まれてしまうような文学鑑賞のあり方に意義を見出す。

- 「文学の鑑賞の時間を、まず理解してのちに、とか、味わいたことを話したり書いたりする、とか、そういうことから解放して、純粹に、読み浸る、味わう、酔う、そういう時間にしたい」(大村1983 p.32.)
- 「大人になって文学を読んで心を動かされることであっても、その感動をじょうずに表現できるとは限らないでしょう。表現できないなら、感じてないのと同じだ、なんていうことはありませんよ。気持ちがよくわかって、思わずぼろぼろ涙が出るような、そういうふうを読めたら、それでいいはずですよ。」(大村2003 pp.151-152.)

文学作品の魅力は、そこから得られる感動を言葉にできないながらも、胸中の琴線に触れる読書経験が得られる点にあると言えよう。

時代を超えて読み継がれる文学作品の1つに、フランシス・ホジソン・バーネット『小公女』¹⁾がある。この作品は、明治の翻訳家：若松賤子により1888年版が『セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事。』として翻訳されたのをはじめとして、菊池寛・川端康成・野上彰・伊藤整ら、多くの著名な作家により1905

年版が『小公女』として翻訳されてきた。川端康成(1967)は、「ほんとうに、息もつかずに読みすすまずにはいられなくて、しかも、ページが残りすくなくなるのが惜まれる物語です。」(「解説 作品と作者について」p.322.)と述べ、伊藤整(1953)は、「こんなにおもしろくって、かわいそうで、勇ましくって、人の心の美しさを書いたお話は、なかなかほかには求められません。」(「あとがき」p.376.)という。さらに、時代が下り、高樓方子(2011)は、「読者の心にしっかり刻まれる光景を、これほどいくつも湛えている物語というのは、もうそれだけで、文句なしに力強い作品だと言えるでしょう。(中略)『小公女』は、静かに光る一つ一つの小石を、ストーリーという美しいビーズの鎖で繋げていった作品のように思うのです。その芯を通っているのは、不幸のどん底に陥った健気な少女が最後にまた幸せになるという、お定まりの筋だとしても、話を推し進めていく登場人物たちの生き生きした姿や描写の美しさが、感傷的で凡庸なドラマに墮す隙を、けって与えないのです。」(「訳者あとがき」p.394.)という。現代に至るまで翻訳され続ける『小公女』は、時代を超えて翻訳者の心に響く作品と言えよう。

『小公女』は、現在から35年前の1985年に世界名作劇場(フジテレビ系)として放映された『小公女セーラ』の原作である。筆者は、『小公女セーラ』に心引かれ、

当時の完訳本・伊藤整訳『小公女』(新潮文庫)を読み浸った。この作品との出会いは、国語を得手とせず、それまで中・長編のまとまった文学作品を読むことなどなかった筆者が文学作品の読み方を見つめ直す転機となった。語彙力も読解力もともにおぼつかなかった当時の筆者は、作品からクリシェとも言えるような教訓をすくい取ったりストーリーを雑駁な表現で概括したりすることが文学の読みであると捉えていたような気がする。中学校教科書定番と言われる教材群を読んでも心に響くことはなく、文学の学習とは読者の感情とは関わりなく授業で教師が示す解釈を暗記することとしていた節がある。しかしながら、『小公女』は、文学になじみの薄い当時の筆者を作品世界に引き込む魅力あふれるものであった。悲しくつらい境遇にありながらも自分を律しつつ健気に美しく生きる「セーラ」の表象が心の中で広がってゆくたびに、言葉ではすくい取れない抑えきれない情感で心満たされた思い出が残っている。そして、その情感は、35年を経た現在でも、作品世界に触れるたびに色あせることなく鮮やかに蘇ってくる。

時代を超えて多くの読者に感動をもたらし続けてきた『小公女』であるが、その感動の源泉は、豊かな表象を読者の脳裏に現象させることばの仕組みにあると考えられる。豊かな作品世界を内包する『小公女』には、作品から陳腐な教訓をすくい取ったり、あるいは、主題を安易な言葉で概念化したりするのを、ともに拒むことばの仕組みが備わっており、そこから作品の魅力が表出するのであろう。

2. 問題の所在

本研究の目的は、バーネット『小公女』(*A Little Princess*1905年版翻訳)について、語り語られる作品のことばの仕組みを俯瞰的に捉え、語り手の批評意識を超える領域を読むことで、登場人物たちの主体的に生きる姿が織りなす作品世界の重層性を解明することにある。

『小公女』は個性的な登場人物たちが種々様々な感情を交錯させながら展開されるが、作品のことばの仕組みを分析していくと、作品世界に生きる人物たちについて語り手が批評しきれていない領域が浮かび上がる。こうした語り手の批評意識を超える領域を読むことで、登場人物たちのそれぞれが主体的に生きる世界が開かれる。そうした、登場人物が生きる領域と語り手が語る領域とを切り分け、それらを俯瞰する読みをすることで、ストーリーの流れを表層的に捉えるだけの読みを超え、登場人物たちの生きる姿が織りなす重層的な作品世界が読者に表象される。

こうした作品の読みは、先行研究で解明されていない『小公女』の作品世界を明らかにすることにもつながる。『小公女』に関わる先行研究では、主人公「セーラ」

の行動・成長変化・人物像、翻訳者によって異なる「セーラ」像の多様性、作品世界が内包する社会・文化的意味といったテーマが課題として取り上げられている。

「セーラ」の行動とその意味を解明したのが、廉岡糸子(2003)・川端有子(2006)・牟田有紀子(2019)である。廉岡(2003)は、「セーラの場合、強靱な精神力を発揮してシンデレラとは異なったやり方で逆境を迎え撃っている。」(p.131.)とし、「バーネットがこの物語で最も描きたかったのは、(中略)権威と闘う少女だろう。」(p.153.)と作者の意図を推察する。川端(2006)では、「プリンセス・セーラは、言い換えれば甘やかされたインドの『王様のお嬢さま』から、フランス革命下の逆境にも負けぬ『高貴な王妃マリー・アントワネット』を経て、大英帝国の家庭を統べる『帝国のレディ』へと変化をとげていくのである。」という。牟田(2019)は、「セーラ」がプリンセスになろうと挑戦し続ける行動に着目し、『小公女』における「セーラ」は、「おとぎ話のシンデレラのように助けを待っているだけでなく、「自分の理想の少女像を個性として獲得しようと試みる物語」(p.81.)と読み解く。

原作と、異なる訳者による翻訳書とにおける「セーラ」の描かれ方の違いに注目し、「セーラ」像の変遷を考察したのは、種田和加子(2019)である。「受容の過程でこうした改変²²なり、読み替えが起こることを止めることはできないし、それぞれの再話にそのつど立ち上がるコンテクストをみていくことが、少女文化研究には必要である」(p.37.)としつつ、「セーラ」像の変遷を訳語の分析を通して考察している。

ある特定の翻訳を取り上げ、「セーラ」像を解明したのは、目黒強(2007)・佐藤真衣(2011)である。目黒(2007)は、現在普及している『小公女』の原話である若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」を取り上げ、「セイラが従順には描かれていなかったことをあわせ考えるに、(中略)当時の日本社会におけるジェンダー編成から逸脱した」(p.99.)「良妻賢母という規範には収まらない少女」(p.104.)として「セーラ」の人物像を捉えている。佐藤(2011)は、『小公女』翻訳にみえる川端康成の少女像を究明するために、「セーラ」像に着目し、伊藤整の翻訳と比較する。そして川端康成の翻訳から「お嬢様風でかつ上品なかわいらしさのある」(p.62.)「明るく、前向きな、慈悲深い」(p.63.)「セーラ」像を見出している。

また、主人公「セーラ」そのものだけでなく、作品世界が内包する社会・文化的意味を考察したのは、鳥集あすか(2012)・川端有子(2013)である。鳥集(2012)は、登場人物相互の対照性を分析し、「男性に寄りかかるとでしか、『お姫様』としての立場を確立することができ」(p.53.)ない「セーラ」と、働く女性として『良妻賢母』をよしとする神話のストーリーのなかにおい

て邪魔者(=悪)でしかない」(p.49.)「ミンチン」とを対照的に描くことで、『小公女』は、近代家長制という神話を維持するのに一役買ってしまった作品」(p.54.)と結論づける。川端(2013)は、作品世界にみられる家族像に注目し「結末は、セーラが救われるだけではなく、インドの紳士が『トムおじさん』になるという相互関係の上に超規範の家族が回復され、ハッピーエンディングを迎える」と読む。

さらに、宗意和代(2015)は作品論ではなく翻訳論であるが、『小公女』の作品世界に言及した箇所では、作者の意図や英国階級社会と関わらせて「セーラ」像を明らかにするとともに、明治から現代に至るまで翻訳されるたびに変容する「セーラ」像を分析している。

以上のように、『小公女』に関わる先行研究では、論者ごとにテーマは異なるにせよ、主人公「セーラ」、あるいは、「セーラ」の置かれた社会文化的環境というように、主人公を中心とする作品世界を単層的に解明する研究が展開されてきたと言える。したがって、語り・語られる作品のことばの仕組みを捉え、語り手が語り得ていることと語り得ていないこととの相関を読み、作品世界の中で主体的に生きる登場人物それぞれが織りなす作品世界の重層性を明らかにする本研究は、先行研究とは異なる方向で『小公女』の作品世界にアプローチするものである。

3. 研究の方法

『小公女』における語り・語られることばの仕組みを分析するために、本研究では、田中実(1996・1997)の読みの方法論を採用する。「読み手は〈ことばの仕組み〉を捉えながら、感動と批評によって自己(読者主体)を倒壊させていくことが肝要」(田中1997 p.136.)というように、田中の読みの方法論は、読者が作品のことばにこだわりながら豊かな作品世界に感動をもって出会うための方法論として有効である。

田中(1996・1997)は、文学作品の読みの方向性、および、あり方について、次のように述べる。

- 「理想の読者たろうとするためには、(中略)大切なことはプロットからテーマへという捉え方でなく、読者の感動の源泉を問いながら、プロットやディテールを支える〈ことば〉の〈内なる必然性〉、その構造的性、奥行きを探りながら、その作業を通して《作品の意志》を捉えることだとわたしの場合は考えている……。」(1996 pp.296-297.)
- 「〈読み〉は作品の細部と細部を連結させて平面を造り出すことから、これをいかにして立体化していくかであるが、この奥行きにして読む方法を具体化するポイントの一つは、やはり〈語り手〉論なるものである。」(1997 p.210.)
- 「『主人公主義』で作品を読まずに、その主人公がいかに表現されているのか、語られているのかを併せ

て読むことを勧めてきた。(中略)主人公の領域に対して、超越的に分離した〈語り手〉の領域があるだけでなく、そこには〈語り手〉自身の批評主体が描き出されており、これを自覚的に捉えること、こうしたかたちで〈語り手〉と主人公を分離するのは小説の読み方の基本であろう。」(1997 p.213.)

主人公の行動や境遇のみを読むのではなく、主人公を中心とする作品世界が語り手によっていかに語られ批評されているかを読むことにより、主人公をはじめとする登場人物が生きる世界と語り手が語る世界とが分離され、作品世界の構造的性・立体性が立ち上がる。こうした読み方を採用することで、『小公女』は、父親を亡くした主人公が苦しい生活の末に莫大な資産を手にするという単純なプロットの物語として読むことを超え、豊かな作品世界が読者に表象されよう。

本研究では、人物・出来事が語り手によってどのように語られているか、そして、それらの人物や出来事を語り手がどのように批評しているかを分析し、語り手が語り得ていることと語り得ていないこととの関係を考察することで、『小公女』作品世界の重層性を明らかにする。そこで、はじめに、作者バーネットが書き残した作品のまえがきと、作品の全体構成とを照合し、『小公女』が主人公のみに焦点化して読むにふさわしくないことを確認する。続いて、個々の人物ごとに作品の語りを俯瞰し、語り手が語っていることと、語り手が語り得ていないことを読む。語り手の意識を越える領域までを読むことで、『小公女』に描かれた作品世界の豊かさが浮き彫りになる。

本研究で分析対象とする翻訳は、バーネット1905年版の完訳本である。バーネットによる作品の前書きを含めて訳出した畔柳和代訳(2014『小公女』(新潮文庫)を取り上げる。なお、以下、翻訳本の引用箇所は(新潮 p.○.)と記す。

4. 全体構成に関わる作品の語り

作品の語りの構成を全体的に捉えるために、作者・バーネットが書き残したまえがきと章立てに注目する。

作者まえがき(「ことの真相」新潮pp.5-7.)をふまえるならば、『小公女』は、主人公「セーラ」に焦点化して読むだけでは捉えきれない豊かな作品世界を内包していると言える。「セーラ」の境遇をシンデレラ・ストーリーなど紋切り型の物語に還元・抽象化するといった読みでは、『小公女』の豊かな作品世界は捉えきれない。作者まえがきは「物語には書かれていないことが常に含まれているものです。このことに多くの方がお気づきかどうか、私にはわかりません。どれほど多くのことが語られないままになるか。」と書き出され、「セーラと同じくらい実在している彼ら」として「ロッチェ」「ベッキー」「アーメンガード」「メルキゼデク」が取り上げられている。「セーラと同じくらい実在して

いる彼ら」という表現からは、これらの脇役人物が主人公「セーラ」と関わりながら主体的に生きる姿や、脇役人物と「セーラ」とが物語の中で相互主体的に影響しあう姿を描き出したという作者の意図が推察される。

『小公女』における脇役人物の重要性は、作者まえがきのみならず、その章立てからも明らかである。前半部の章立ての一部は「アーメンガード」「ロッチェ」「ベッキー」となっており、「セーラ」と強い絆で結ばれる少女たちが見出しとなっている。父親死亡後の後半部では、「次の三人がいなければ、セーラの子ども心はさびしさのあまり引き裂かれかねないときもあった」(新潮p.130.)として、「ベッキー」「アーメンガード」「ロッチェ」との交流が語られる。「メルキゼデク」については、2章が割かれている。さらに、作者まえがきには出てこない人物であるが、後半部の1章は、街で助けた乞食の少女「アン」との「ぶどうパン」をめぐるやり取りに割かれるとともに、最終章は、その少女「アン」と「セーラ」の心の交流で結ばれている。

このように、作者の意図を示したまえがきと作品の章立てより、『小公女』は、主人公「セーラ」に焦点化して読むのではなく、「セーラ」と脇役人物との相互主体的な関わりを読むことに必然性があると結論づけられる。

続いて、語り手の作品内での立ち位置を確認した上で、代表的な登場人物それぞれが主体的に生きる領域と語り手が語り批評する領域とを分離し、語り手が語り得ていることと語り得ていないこととの関係进行分析することで作品世界の重層性を解明する。

5. 登場人物に関わる作品の語り

5.1. 語り手の位置

『小公女』語り手の作品世界に対する介入度合いは、限定的・抑制的なものとなっている。

「その瞬間セーラが顔を覆わずにふと天窓を見上げていたらどうなったか、私(語り手…筆者注)にはわからない——この章はずいぶん違う終わり方になったかもしれない」(新潮p.259)と語られるように、作品世界に生きる人物の行動は語り手から一定程度独立・自立しており、語り手は作品世界のすべての出来事を完全に制御しない立ち位置に立っている。こうしたことばの仕組みによって構造化・立体化される語り手と登場人物たちとの関係性より、作品世界に生きる人物たちの、語り手が捉えきれない他者性の領域が浮き彫りになる。語り手にとって登場人物たちは、語り手自身の思惑を超えて行動し得る他者であるとともに、それゆえに、その行動や心情のすべてを理解しきることにはできないということになる。

5.2. 語り手の批評を超えて生きる登場人物

作品のことばを丁寧に拾っていくと、登場人物の描

写と、それに対する語り手の批評とにひずみのある箇所が散見される。そうした語りのひずみを対象化することで、語り手の批評を超えて主体的に生きる登場人物たちの姿が表象される。以下、主な登場人物について、人物ごとに考察する。

5.2.1. ミンチン学院の生徒たち

語り手は、「ミス・ミンチンの生徒たちは頭のにぶい、実利的な若い人たちだった。裕福で快適であることに慣れきっていた。」(新潮p.129.)と否定的に概評する。しかしながら、こうした生徒たちのうちの二人(アーメンガード・ロッチェ)がいなければ、「セーラの子ども心はさびしさのあまり引き裂かれかねないときもあった」(新潮p.130.)とあるように、「セーラ」は、これらの生徒たちによって救われる。しかも、生徒たちの「誰にも干渉しなかった」(新潮p.130.)「セーラ」からの働きかけではなく、語り手から否定的に見られている「ミス・ミンチンの生徒たち」の側からの勇敢な行動によってである。

生徒の一人「アーメンガード」について、語り手は「あわれな、にぶそうな、幼い目」(新潮p.34.)「やさしいが、やさしいのと同じぐらい頭の回転が遅い」(新潮p.132.)と、それほど積極的に評価していない。「セーラ」も一時「こんなばかんな人からは、なるべくはやく離れた方がいいと思ったのだ」(新潮p.134.)というほどである。にもかかわらず、「アーメンガード」はなりふりかまわず、見つかったら罰を与えられることを承知で「そんなことどうでもいい——ちっともかまわない。」(新潮p.136.)と屋根裏部屋に上がり、「私はあなたなしでは生きていけない」(新潮p.138.)と訴え「セーラ」との友情を回復させている。語り手によって「にぶそうな」と批評される「アーメンガード」が自らの勇敢な行動によって、「私は気位が高すぎて、仲よくしてって言えなかった。」(新潮p.138.)と「セーラ」に反省を促すほどである。

もう一人の生徒「ロッチェ」は、「どうしようもない子に育っていた。ほしいものや気に入らないことがあれば泣きわめく。」(新潮p.50.)と、感情や欲望の赴くままに行動する人物として語り手に批評される。しかしながら、「セーラ」の屋根裏部屋を探し当てる際には、「幼い仲間と話し、年長の子たちにまとわりついて」(新潮p.142.)情報を集め、「話し手たちが知らぬ間にもらした情報をたよりに」(新潮p.142.)行動する策略家の一面が伺える。また、屋根裏部屋で「セーラ」に再会した際には、涙をこらえ「自分を抑えようと努める」(新潮p.142.)こともできるなど、感情を抑制することもできている。また、「セーラ」にとって「ロッチェ」の存在は「ふっくらとした幼い体のぬくもりにどこか安らいだ」(新潮p.142.)というもので、心の飢えを癒す存在である。

苦境に陥った「セーラ」はこれら二人の生徒と強い

信頼関係を築くことで精神的な安らぎを得る。それは、「ミス・ミンチンの生徒たちは頭のにぶい、実利的な若い人たちだった。」と批評されるような人物ではなく、物質的な利害を超えて大切な他者を思い合い、互いに支え合おうとする人物の姿である。ところが、語り手は「アーメンガード」と「ロッチェ」のそうした人間としての豊かさを批評していない。

一方、「セーラ」と敵対する「ラヴィニア」についての語り手の批評も、「ラヴィニア」自身の生きる世界に踏み込んだものではなく、表面的な批評にとどまっている。語り手は、「ラヴィニア」について「底意地が悪かった。」(新潮p.47.)というような否定的な批評に終始している。そして、「ラヴィニアは常に面倒を起こしてやろうとたくらんでいて、元看板生徒を厄介な目に遭わせることができれば、きっと大満足だったことだろう。」(新潮p.130.)と推量する。確かに、プリンセスのふりをする真似事について「セーラ」が「内緒にしておくつもりだったのに、ほぼ全員がそろっている前でラヴィニアがばかにした」(新潮p.83.)り、「セーラ」が「廊下でラヴィニアとすれ違って、泥のついたスカートを笑われ」(新潮p.202.)たり、といった行動からは「ラヴィニア」の意地悪さが見て取れる。しかしながら、「セーラ」という存在が「ラヴィニア」のアイデンティティーを脅かす存在であったことを考慮すると、「ラヴィニア」の意地悪さの必然性を読み取ることもできる。「セーラ」という「新入生が来るまで、ラヴィニアは学校のリーダーだと自負していた。」(新潮p.47.)ところが、「やがてセーラもリーダーであることが判明した。しかも(ラヴィニアのように…筆者注)意地悪な態度をとるからではなく、決して意地悪をしないから。」(新潮p.47.)という状況に置かれることで、「ラヴィニア」は「セーラ」と対立しなければ自分の社会的立ち位置を守ることができなくなるであろう。語り手の「ラヴィニア」に対する批評は、「セーラ」の存在によって「ラヴィニア」が社会的に追い詰められる側面があることについて言及したものはなっておらず、一面的な批評にとどまっていると考えられる。

5.2.2. ミンチン

「セーラ」と激しく敵対する学院長「ミンチン」についても語り手は、「ラヴィニア」同様、否定的な批評に終始し、「ミンチン」自身の生きる世界に踏み込まず、表面的な批評にとどまっている。

語り手は、「ミンチン」の人物像について「きわめて打算的な女」(新潮p.45.)「狭量で想像力のない」(新潮p.189.)「賢明な女性ではなかった」(新潮p.310.)「この浅ましい女」(新潮p.312.)と酷評する。確かに、「あの子のお金の前でへいこらすくらい低俗で意地きたなくて、あの子のお金がなくなったらひどい仕打ちをする」(新潮p.314.)一連のふるまいからは「ミンチン」の醜さが見て取れる。

しかしながら、「自分がセーラを一度たりとも好きでなかったことがいっそうよくわかった」(新潮p.114.)あるいは「ずっと嫌いだった子どもを背負わされた」(新潮p.108.)という思いを「ミンチン」に抱かせる状況を「セーラ」自身が生み出している側面もある。「内心とても腹立たしく思うことのひとつは、自分はフランス語を話せないことで、このいらだたしい事実は隠しておきたかった」(新潮p.29.)「ミンチン」の前で、しかも他の生徒たちのいる教室の中で、「セーラ」は、「きれいで流暢なフランス語」(新潮p.31.)を話し出す。また、別の場面では、「私がプリンセスで、先生が私を引っぱたいたらどうなるだろうと考えていました」(新潮p.189.)と発言したりする。こうした「セーラ」のふるまいは、「支配力をふるって権威を感じるのが好きなタイプ」(新潮p.119.)の「ミンチン」の自尊心を著しく毀損するものとなるばかりか、学校経営者として自らの立場を揺るがすものと受け止められざるを得ない。

「ミンチン」に対する語り手の批評は、「ミンチン」の置かれた立場に踏み込んだものとはなっておらず、一面的な批評にとどまっていると考えられる。

5.2.3. セーラ

「セーラ」についても語り手の批評を超えて主体的に生きる姿が表象される。語り手は「セーラ」の心の動きの深い部分を批評しきれていない。

語り手は「セーラ」の顔立ちなどの外見をはじめとして、行動、表情、知性など、多岐にわたって批評をしている。

- 「大きな目は一風変わった大人びた思慮深さをたたえている」(新潮p.8.)
- 「自分をみにくいと思う点でセーラは誤っていた。(中略)不思議な魅力を備えている。体は細くてしなやかで、年のわりに背が高く、小さな顔は生き生きとしていて、魅力的だった。髪はゆたかで黒く、毛先だけ巻き毛だ。」(新潮p.15.)
- 「返事をするときのセーラのくすんだ緑色の目は真面目そうで、たいへんやさしそうにも見えた。」(新潮p.17.)
- 「生来の気質と聡明さが備わっていなかったら、自己満足しきった子になったかもしれない。セーラは賢い頭で自分と環境に関して、分別のある筋の通ったことを考えて」(新潮p.46.)
- 「セーラの親しみをこめたまなざしは疲れている人や退屈している人にいつだって効き目があった。」(新潮p.180.)

これらは限られた例に過ぎないが、全編を通して語り手は「セーラ」の容姿やふるまいや才智を称賛している。それは、「ミンチン」や「ラヴィニア」に対してなされる否定的な批評と対照的である。

しかしながら、こうした批評は、それぞれの場面で

の表層的な批評にとどまり、「セーラ」の切実な思いを真摯に受け止めた批評になっていない。それは、次の箇所を参照すると、より鮮明になる。

○「ある晩たいそう面白おかしいことが起きた——しかし、それはおそらく、ある意味ちっともおかしくないことでもあった。」(新潮p.160.)

これは、貧しい身なりでお使いに行った「セーラ」が「ドナルド」に六ペンス硬貨をめぐんでもらう場面での語り手の批評である。

この場面での「セーラ」は、

○「目は涙で光っていたけれども、ほほえもうと努めていた。自分が奇妙でみすばらしいかっこうをしていることはわかっていたが、乞食と間違えられかねないとはこのときまで思ってもみなかったのだ。」(新潮p.164.)

と描写されている。「誇り高い少女」(新潮p.129.)の「セーラ」にとって、目に涙を浮かべるほど、自尊心が打ち砕かれそうな衝撃的な出来事であるにもかかわらず、語り手は「たいそう面白おかしいこと」と傍観者的に批評するにとどまり、「セーラ」の切実な思いを受け止めきれていない。(もちろん、直後に「ちっともおかしくないこと」と言い換えてはいるが、それでも「セーラ」の悲痛に十分寄り添った批評とはなり得ていない。)

このように、語り手は「セーラ」にまつわる出来事や外形的様相を表層的に批評するのみで、「セーラ」が主体的に生きる姿とそれが対人関係にもたらす意味とについては十分批評しきれていない。そこで、語り手が批評しきれていない内容について、作品全体に関わる、以下の3点に絞って考察する。

① 社交性の広がり

学院入学当初の「セーラ」は、

○「よその少女たちにあまり興味はないが、たくさんの本があれば、さびしさをまぎらわすことができる。」(新潮p.11.)

○「私は遊ぶときにお話を作って一人で話すので、それを聞かれないの。人が聴いていると思うと楽しくないのよ」(新潮p.39.)

とあるように、他者との関わりを避け自分の世界に閉じこもる少女として表象される。

しかしながら、こうした「セーラ」の心理状態は、苦境に陥ってから変化する。

○「三人(「ベッキー」「アーメンガード」「ロッチェ」…筆者注)がいなければ、セーラの子ども心はさびしさのあまり引き裂かれかねないときもあった」(新潮p.130.)

とあるように、心の通じ合う他者と関わることで、つらく寂しい心が慰められることに気づく。

また、

○(ベッキーと…筆者注)セーラとは目と目で、仲良し

同士が通わせる目のきらめきで通じ合った。(新潮p.95.)

○子どもたちはしばらく互いを見合っていた。やがてセーラがマフから手を出してカウンター越しに差し出し、アンがその手をとって、二人はしっかり見つめ合っていた。(新潮p.329.)

という描写から、他者とまなざしを交流することで、絆を確かめ合う描写もある。

「セーラ」は、さまざまな人物と心を通わすことで、学院入学当初は持ち合わせていなかった社交性を広げていく。

このように、「セーラ」は大切な他者と絆を深めていくことで社交性を広げているが、語り手は、こうした「セーラ」の変化を批評しきれていない。

② 選択的対人関係性

「セーラ」は、さまざまな人物と心を通い合わせているが、それは一部の人物に限られ、関わりを深めようとする人物を限定的に選択する。つまり、互いに理解し合うことが難しい人物とは関わりを避けるのである。

○「セーラは多くを望まず、誇り高い少女なので、いまや自分に対してきこちなく接し、よくわからないと思っていることがあらわな少女たちと、前と同じように親しく接しようとはしなかった。」(新潮p.129.)

○「セーラは面倒は起こさず、誰にも干渉しなかった。」(新潮p.130.)

こうした「セーラ」の選択的対人関係性は、「ミンチン」と決別する結末場面でのやりとりにもつながる。「ミンチン」の「どうか一緒に帰りませんか」(新潮p.311.)という問いかけに対し、「セーラ」は「一緒に帰らない理由はおわかりですね」(新潮p.311.)と応える。「セーラ」が学院に戻らない理由については、直前に「天涯孤独で、追い出されるかもしれないと言われた日のこと」と「屋根裏部屋で一人過ごした身も凍える空腹の時間」を思い出したという「セーラ」の心内描写があるため、「ミンチン」に苦しくつらい思いをさせられたからであると表層的には読める。

しかしながら、「物心がついて以来、大人や大人の世界に思いをめぐらせていなかった時期など思い出せなかった」(新潮p.8.)「賢い頭で自分と環境に関して、分別のある筋の通ったことを考えて」(新潮p.46.)と評される「セーラ」の思慮深く想像力豊かな人物像を考え合わせると、苦しくつらい思いを強いられたことのみを理由に学院に戻らないという判断をしたと短絡的に捉えることはできない。

学院に戻らない「セーラ」の選択には、選択的対人関係性とも言うべき「セーラ」の一貫した価値観が反映されていると考えられる。それは、卑しいふるまいをする人物や理解し合うことが難しい人物との関わり

を避ける一方、心を通い合わせることでできる人物との親交を大切にするというものである。「セーラ」にとって卑しいふるまいをする人物の代表が「ミンチン」であることは、次の一連の語りからわかる。

- セーラ「(学院に…筆者注)戻らなくていいなんてうれしいです。」「(ミンチン…筆者注)先生はきっとひどく怒るでしょう。私が気に入らないんです。私もよく思っていないので、」(新潮p.305.)
- セーラ「嘘ってね——悪いだけじゃない——いやしいのよ。」「かっとなってミンチン先生を殺すんじゃないかって。いじめられていると——でも、いやしいことはできない。」(新潮p.233.)
- ミンチン「自分がセーラを一度たりとも好きでなかったことがいっそうよくわかった」(新潮p.114.)
- ミンチン「わたくしはずっとあなたを大切に思っていましたよ」(新潮p.311.)

「セーラ」にとっての「ミンチン」は、心に反することを平気で公言する嘘つき、「悪いだけじゃない」「いやしい」人物であり、同じ空間で生活することを最も忌避すべき人物となる。

また、学院には「ミンチン」以外にも「セーラ」と互いに理解し合うことの難しい人物がいる。「底意地が悪かった」(新潮p.47.)と評される「ラヴィニア」、さらには、「責任転嫁できる相手」(新潮p.127.)として虐げられ続けてきた「一流の召使たちではなく、行儀も悪く、気だても荒かった」(新潮p.127.)使用人たちである。こうした人物たちのいる空間に戻れば、以前のように特別寄宿生扱いになったとしても、そこに緊張関係が生まれ、居心地の悪い場所になることは「セーラ」自身、容易に想像できたであろう。ロンドンに来て以来「セーラ」は、どんな境遇にあっても、互いに心の通じ合う他者と絆を深め、居心地のいい場所を創造し、自分らしく生きる生き方を追求し続けてきた。そのような「セーラ」が学院に戻ることは、自分らしく生きる生き方を曲げることになる。

「セーラ」は結末で「ミンチン」をはじめとする敵対する人物たちに復讐するわけではなく、関わりを避ける選択をする。学院へ戻らないという決断は、自分らしい生き方を追求するための障害となる場所を避けるという「セーラ」の価値観を反映させたものと読めるが、語り手は、こうした側面について批評しきれていない。

③見えていない他者性

語り手に聡明と評される「セーラ」ではあるが、「セーラ」自身に見えていない世界がある。自分という存在が、他者にもたらす意味である。

- 実はセーラは、自分の存在があわれなベッキーにとって持つ意義も、自分がいかに素晴らしい後援者に見えるかも露ほども知らなかった。(新潮p.87.)

「セーラ」のこの意識は、友好関係にある「ベッキ

ー」のみならず、敵対関係にある「ミンチン」や「ラヴィニア」にも敷衍される。先述の通り、「セーラ」の存在は、「ミンチン」や「ラヴィニア」にとって自分たちの社会的立ち位置を脅かすものである。しかしながら、「セーラ」は、自分の存在をそう受け止める他者の他者性が見えていないのである。

つまり、「セーラ」には自分の存在が他者に与える影響に無頓着な面がある。「ミンチン先生にもいいところがあるのかもしれない」(新潮p.138.)と敵対する他者の立場を思いやる度量の広さを持ち合わせている「セーラ」ではあるが、自分という存在が他者にどう受け止められるかについての思慮は十分ではない。こうした思慮不足が敵対する人物との対立関係をより深めることになるわけであるが、語り手は「セーラ」のそうした人間関係にひずみをもたらす無頓着さを批評していない。

以上①～③の通り、作品世界には「セーラ」が主体的に他者と関わり成長する姿と、それが対人関係にもたらす意味とが描かれていながらも、語り手の批評はそうした領域に到達し得ておらず、表面的・断片的な批評にとどまっている。

6. 結語

本研究では、『小公女』における語り語られる作品のことばの仕組みを俯瞰的に捉え、登場人物が生きる領域と語り手が批評する領域とを切り分け語り手の立ち位置を相対化することで、登場人物たちの主体的に生きる姿が織りなす作品世界の重層性を解明した。

『小公女』は、父親を亡くした主人公が苦しい生活の末に莫大な資産を手にするという単純なストーリーに還元されるような作品ではない。また、登場人物を善悪で2分し、「セーラ」が「ミンチン」をはじめとする敵対する人物と対峙する勧善懲悪の作品でもない。

『小公女』では、作品世界に生きる登場人物たちの主体性が事細かく描写されており、それは、主人公の境遇の変遷を抽象化したり、人物関係を善悪の対比関係で捉えたりするだけの単純な読みをともに拒むことばの仕組みとなっている。

しかしながら、『小公女』における語り手は、作品世界に生きる登場人物たちの主体性を批評しきれていない。語り手は、主人公「セーラ」の外形的な姿を称賛する一方、「セーラ」に敵対する人物を否定的に批評する。語り手の批評に引きずられてしまうと、表象される作品世界は表層的・平面的なものに陥るおそれがある。そうした表層的・平面的な世界を超えた豊かな作品世界は、語り手という主体が捉え得る世界を相対化し、登場人物が生きる世界と語り手が語り批評する世界とを切り分け、それらを俯瞰する読みをすることで表象される。本研究では、語り手が語り批評する領域を超えて生きる登場人物たちの主体性とその相互関係

性を浮き彫りにすることで、登場人物たちの生きる姿が織りなす重層的な作品世界を明らかにした。

『小公女』の作品世界では、心を通わせることのできる人物とは絆を深めるが、それがかなわない人物とは関わりを避ける「セーラ」を中心に、それぞれの登場人物がおのおの独立した他者性を発揮しており、人と人とが理解し合うことの尊さと難しさが対照的に描き出されている。

注1：バーネットによる本作品は、1888年版 *Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's* が出版された後、加筆修正され1905年版が *A Little Princess : Being the Whole Story of Sara Crewe Now Told for the First Time* として出版されている。

注2：「セーラ」について、若松賤子訳では「強い、意志的な視線」をする人物として描かれていたが、その後、「伏し目がちの少女」「慈愛あふれる少女像」へ変化していると指摘されている。

引用文献：

- 伊藤整訳(1953)『小公女』新潮文庫 p.376.
 廉岡糸子(2003)『大胆不敵な女・子ども—『小公女』『秘密の花園』への道』燃焼社
 川端康成訳(1967)『世界の名著10 小公女』ポプラ社 p.322.
 川端有子(2006)『少女小説から世界が見える』河出書房新社
 川端有子(2013)『『小公女』における家族の肖像—理想・虚構・

- 現実』神宮輝夫ほか編『子どもの世紀—表現された子どもと家族像—』ミネルヴァ書房
 畔柳和代訳(2014)『小公女』(新潮文庫)
 目黒強(2007)「若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」にみるジェンダー」神戸大学文学部国語国文学会『国文論叢』38 pp.97-107.
 宗意和代(2015)「翻訳の可能性—『小公女』からロマンス小説へ—」博士論文 法政大学学術機関リポジトリ
 牟田有紀子(2019)「変容するプリンセス—『小公女』と子ども向け映画作品による少女像の構築について」『城西大学語学教育センター研究年報』11 pp.77-94.
 大村はま(1983)『大村はま国語教室 第四巻』筑摩書房 p.32.
 大村はま(2003)「『うまく言えない』と『わかっていない』は違う」大村はま・苅谷剛彦・苅谷夏子『教えることの復権』ちくま新書 pp.151-152.
 佐藤真衣(2011)「川端康成と少女小説—『小公女』の翻訳からみる川端の目指した少女小説—」富山大学比較文学会編『富大比較文学』4 pp.55-66.
 高橋方子訳(2011)『小公女』福音館書店 p.394.
 田中実(1996)『小説の力—新しい作品論のために』大修館書店
 田中実(1997)『読みのアナーキーを超えて—いのちと文学』右文書院
 種田和加子(2019)「風変わりな少女『小公女』の変遷—若松賤子から伊藤整まで—」『藤女子大学国文学雑誌』99・100 pp.21-37.
 鳥集あすか(2012)「〈少女〉を探して：『小公女』にみる理想の少女」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢』46 pp.39-57.